

第三十六回中央教化研究会議 全体会議

司会 全体会議を始めます。座長の灘上智生上人、よろしくお願いいたします。

全体会議座長 現宗研の囑託をしております、灘上智生と申します。よろしくお願いいたします。昨日、今成先生それから伊藤先生両師の講演を頂戴いたしましたして、それを問題提起としまして三つの分科会に分かれまして討議をして頂きました。まず第一の現代の教学の分科会では、撰折論の現代的な把握、それから教学の現代的把握。第二分科会では、教団・教化ということで、世間の目線に立った布教、それから二十一世紀に適應する具体的な教師像、それから葬儀の規範ということが話し合われました。第三分科会といたしまして、現代社会、社会問題への意思表示から立正平和運動につきまして討議が成されました。この全体会議におきましては、この三分科会の方から報告をして頂きます。それでは、「日蓮宗の布教を考える―通仏教化した現状と撰受折伏問題」を統一テーマにおきまして、いままら発表をいただきます。なお都合によりまして、第二分科会、第三分科会、第一分科会の順番で報告をいただきます。質問・要望・アピール等は、報告者が全て終わりましたからお願ひします。それでは、第二分科会座長の伊藤美妙上人、ご報告よろしくお願いいたします。時間は十分以内という事で、よろしく願ひします。

第二分科会座長 第二分科会から報告させていただきます。第二分科会は、今成先生と伊藤先生の講演内容を受けて、撰受折伏問題を、世間の目線に立った布教、二十一世紀に適應する具体的な教師像、また葬儀の規範の視点から検討し、具体的な提案をして頂くということになりました。まず、世間の目線に立った布教、二十一世紀に対応する教師像について、問題提起を影山上人からして頂き、世間の目線に立った布教ということ、一番最初の時点である布教化とは何なのか、という問いかけがございました。それに対して、皆さんからご意見を頂きました。その中で、私たち教師が布教と思つて実践していることは、一般社会の人々が求めている布教ではないのではないか、現代社会に

おける布教教化というのは一体どういうものなのか、ということについて、皆さんから意見が出されました。現在、教師が社会から信用されていないのではないかと、なぜ教師が信用されなくなったのか、もちろん個人の姿勢によると思いますが、基本的なところで何か欠けているというような議論になりました。教師自身に、多様化するニーズに応えるだけの技量がないのではないかと、方法論をもっていないのではないかと、という意見も出されました。社会から信用、信頼されるためには、日頃から社会と係わることに努力する必要があるという意見もだされました。自分のお寺の檀家の次世代を、自分のお寺の檀家の枠で考えるのではなく、どこへ行ってもその人が日蓮宗を信仰している信徒であるという自覚を持ってもらうような布教のあり方が大切ではないかと、これから私たちの子供達が、日本ばかりではなく広い世界に旅立って行く時に、どこに行ったらとしても日蓮宗、そういう信仰を持ってもらいたい、そういうふうにして次世代を育てていく必要があるのではないかとという意見も出ていました。若い人の活動する場が少ないので、それを広げて頂きたい、それには教師の定年制も必要なのではないかと、というご意見も出されました。お年寄りの住職のところにはお年寄りが集まって来る傾向にある、若い人が住職になったり中心になると若い人が集まって来るといふ事実もある、ということ、若い人を教化することができないのではないかとというご意見が出されました。千葉西部で地区統一信行に出してもらおう信徒の方を六十歳以下にして下さいという提案がなされ、実際に行ったそうです。教化する対象を下げた時に私たち教師の自覚が違ってくる、私たちはいまの年代の人達ばかりではなく、次世代の人達を育てていかなければならないんだという自覚が持てるのではないかと、というご意見も出されました。以上が世間の目線に立った布教について、二十一世紀に対応する教師像とリンクしているところがあるので、それらについて出された意見です。本日は葬儀についての規範につきまして、馬渡上人から提案して頂きました。最近、葬儀が形式化してきた原因の一つには、私たち僧侶の側にも反省するところが多々あるのではないかと思います。葬儀のあり方を真つ正面から見つめ直し、葬儀に係わる全般について一種の規範のようなものを作る必要があるのではないかと

うことで、皆さんからご意見を頂いたわけです。なぜ葬儀が儀式化したのか、教師自身の葬儀に対する取り組み方に原因があるのではないか、教師の姿勢が問われるのではないか、というご意見がございました。実際に東京南部では葬儀の心得についてのパンフレットを葬儀の時に配り、皆さんにご理解をいただく、通夜法話の重要性、葬儀の時には法話をするということをお心掛けた方がよいのではないかと、葬儀というのは順縁ばかりでなく逆縁の人への教化のチャンスに繋がるので話すべきではないか、ということも出されました。それは折伏にも繋がるし、もつと葬儀ということを一一般社会の人に理解してもらう事になるのではないかと、と思いました。儀式化している葬儀について、儀式化しないためにはどうしたらいいのか、パンフレットを配る、通夜法話を必ずする、引導文に故人の略歴を入れる、また故人の行状を入れる、などの工夫をするなどが出されました。真宗で宗門を挙げて葬儀の儀礼の研究がなされ、成果を上げているという事例を頂きました。通夜説教をするにあたって、普通ならお経を読んでその後にお話をするんですけども、それを最初にする、どういう意義をもってこういう葬式をするかを最初に説明する、と実際にやっているという方のお話がありました。葬儀が儀式化している中で、儀式化しないためには、私たち教師がそれを意識して、誰が主体であるか、なくなった故人が主体であるということをお忘れなことが大事ではないか、というご意見も出されました。そのようなご意見が出されて、葬儀についての話し合いは終わりました。次に、今年平成十五年からは、現宗研は各プロジェクトに分かれて研究がなされています。それについての経過報告をして頂き、それぞれに皆様のご意見を頂きました。皆様のお手もとにも渡っておりますが、私たち第二分科会ではプロジェクトBのところなんです。それで財政についての報告、過疎過密に係わる寺院の適正配置、お題目総弘通運動総括についての経過報告をして頂き、それについてのご意見を求めました。あまりたくさんは出なかつたんですけども、今日限りではなく、もしご意見があればそのプロジェクトに係わっている人にどんどん意見を言っして下さいということで、終わらせていただきました。以上が第二分科会の報告です。

全体会議座長 ありがとうございます。ちょうど十分ですね。すごいですね。次に、第三分科会座長梅森寛誠上人、お願いいたします。

第三分科会座長 それでは第三分科会、現代社会のご報告を申し上げます。ちよつとまとめきれないでありますが、現段階で報告できることを報告していきたいと思えます。まず、昨日、問題提起といたしまして、社会問題への意思表示ということで、問題提起者石原上人から五項目に渡りまして、人権問題について、生命の問題について、有事法制から改憲に関する一連の問題について、そして事故災害に対する取り組みについて、新宗教について、以上の五項目に渡りましてですね、総論的な提起ということをお聞きいただきまして、その中でとくに力点を置いたのは、人権問題として目下の我々を取り巻く大きな問題になっております拉致問題。朝鮮民主主義人民共和国における日本人拉致、非常に複雑な問題が絡んでいます。それに対してどのような形で私たちは臨んでいくのか、宗門として見解表明をするという、これが出せるのか出せないのかということも含めて、そのための材料も提起してほしいという思惑もありまして、第三部会ではこのことを皆さんに協力をお願いいたしましたわけでございます。ところが問いかげがちよつと唐突であったわけでしょうし、撰折問題で四時間講演を聴いた後なので、頭の切り替えができない状況の中で、そういったものがぼんと入ってしまったんですから、大きな盛り上がりはありませんでした。その中でも色々な意見が出まして、新潟のブルーリボンの運動が盛んであるけれども、宗門としてもメッセージを出すべきとの意見も出されました。アピールするにも世論を盛り上げなければいけない、という意見も出されました。ある人は被害者から直接意見を聞く機会を設けるべきじゃないか、あるいは救う会の方向に向かっているということに対する疑問もありました。色々とその問題の複雑さ、難しさということ、声明を出すということに対する嫌疑感も出されました。アジアの戦争に係わる日本のかつての問題というのにも無視できない、ということもございました。いずれにしても、慎重に行うべきという意見が示されたのではなかったかなと、そんなふうに感じました。そのことを撰折問

題に組み替えてみれば、今日冒頭で、異なる国家体制の国と対話し打開の道を探っていくかということが、国家体制というものを宗教・教団というものに読み替えて撰折問題を見つめていくという我々の立場でやっていくということになるのかなということも提起しました。本日はそれもありますが、立正平和運動という問題を石井上人の方からやって頂きましたですね、立正平和運動の歴史、その盛衰といえますか、盛り上がりのあった時期、停滞している時期、そしてそれを踏まえた総括的な定義、宗制の宗務院規程の第十八条に世界立正平和運動の規程が設けられていますね、本部長が伝道局長、そして宗務所を支部長とすると謳われておりますが、実際はない状態になりつつある事に対する提言、どうしたらいいのかという提言もございました。本日は、多くの方からご意見を頂戴するという今回の趣旨に沿いまして、それらを踏まえた上で自由にといいいますか、会場から全員の意見をいただきました。まとめ切れておりませんので、ざっと羅列したいと思えます。拉致問題と関連した問題も出まして、我々の視点じゃなくて北の視点も考えるべきじゃないかというご意見。あるいは金日成の折伏という、折伏ということは救わなければいけないという意味も持つべきじゃないかという、撰折問題に絡んだご意見。あるいはまた拉致問題以外の問題としましては、立正平和運動の停滞というものについて、どのように結実させていくのかというご意見を頂きました。他の宗教との関係のなかで発信していかねばならないのではないか。今回の運営全般に関する批判もございまして、あるいは声明を出す出さないということにも関係する、つまり情報収集が遅れているんじゃないかという問題。また声明のタイミングの問題の意見もございました。運営に関しましては、今回の趣旨は、意見をまとめるというよりは意見をだして頂いてそれを反映させるというコンセンサスの中で運んでおりました。そのことは冒頭で申し上げましたが、一般参加者の方々のご意見としたら、最初から何等かの叩き台をつくってもう少し具体的な提起をした中で絞った形でやってほしかったと、そのようなご意見があったということもここで追記しておきます。その他の意見としまして、現地に行ってみてやるべきだと、そこで学ぶべきだということ。十八条の規程のことについてはじめて

知ったと。どんどんこの問題は組み替えていかなければならないというご意見もございました。物事を継続していつてどんどんやつていくべきだと。危機感がないというあたりも提起されました。布教研修所研修員の皆さんから、広島へ八月六日に行かれた体験の発言もございました。それらのことをまとめるわけではございませんが、最終的に我々にとって大きな慈悲というものが必要になってくるんじゃないか。深い信仰の中で安国論の最後の実乗の一善ということ、我々に課せられた役目があるのではないか。また機構の問題では、現場をネットワークで結びながら連携していくということをもっと推進していくべきだろうというご意見もございました。大変まとまりのない報告ではございましたが、本日にいたっては、様々なご意見が活発に、昨日はうって変わって出たことは、非常に意味のある会議だったのではないかなと思います。もう一つ追加いたしますと、回教のことについてのヨーロッパの実情が今日の問題提起者から追加して発表がありまして、宗教対話としましてキリスト教、イスラム教、ヨーロッパを中心にそういったものの状況があるわけですが、仏教者もそこに入ってきてほしいという声があるというあたりのこと、示唆的な状況も話して頂きました。そのような中で、我々に与えられた期待された問題が本当にあるんだなというところ、今回のコンセンサスにできたのではないかなという感じとっております。まとまりのない報告でございましたけれど、以上でございます。ありがとうございました。

全体会議座長 どうもありがとうございます。それでは第一分科会座長早坂鳳城上人お願いいたします。

第一分科会座長 第一分科会の報告に入ります前に、昨日の夕食会の後、伊藤瑞叡先生から、基調講演で申し残したことがあるので皆さんに伝えてほしい、というご依頼がありましたので、所長・主任さんの許可を得ましたので、この全体会議でお伝えさせて頂きたいと思えます。檀信徒教化をする場合、信徒に対してどのように説くかということでありますけれども、摂受折伏でいきなり説くのではなくて、衣座室のですね、弘経の三軌、四悉檀、とくに世界悉檀と為人悉檀を用いて信仰に入れて、それから摂折を説くべきであるということ。教学的な説明でわかりにくい

と思いますけど、少し簡単に説明させて頂きますと、日常様々なことを行っておる、文化活動を行っておる、それに対して法華の信仰に結びつけるように教化して、その後に本門法華の教えを説いたらいいのではないかと、このような内容であったと思います。第一分科会、現代と教学部会でございますが、第一日目参加数三十八名、二日目が二十九名の参加で行われました。伊藤瑞叡先生と今成先生の撰折に対する見解概念の説明は、かみ合わないのわかりにくかったというのが、多くの意見であったように思います。ここに説明させて頂きますと、まず、「常不輕菩薩のごとし」は『開目抄』にないけれどもその心は持つておられたのでは、というのが出ました。現代の教化の視点ということで教義的な討議をしないようにという打ち合わせでご依頼をしたのではありますけれども、参加の皆さんから、教義的な正しい理解なしに教化はできないという意見が強くなりましたので、教学的な疑問点やわからないことは皆さんでどんどん意見を出し合つて、教学の共通認識と申しますか、そういうことを踏まえて現代の教化の視点を二日間かけて討議をしましょう、という了解にいたしました。撰受折伏はとくに三派合同の後を考慮に入れて考えなければいけないという意見。現状においては、勸学院の『宗義大綱読本』においては折伏正意的傾向なのかも知れないけれども、教義的には折伏正意的なのかも知れないけれど、現状においては撰受ではないのか。折伏を実際に行っている人はいるんですか、ということも出ました。有本上人の問題提起の中で、折伏の後発的なイメージということに対しては、撰受折伏というのは表裏であつて、お父さんの慈悲を折伏、お母さんの愛を撰受と考えるならば、そのように理解すべきではないと言うふうな意見もできました。撰受折伏は時を踏まえて考えなければならぬので、軽々に論じられるべきではない。撰受折伏は機根に応じて説くべきであつて、対機説法なのだからどちらかに限定してどうこうするものでもない。自分としては折伏に身においておるけれども、実践の中では撰受的対応、撰受的精神でやっているとか、そのような意見が第一日目には出ました。そして第一日目のちょうど最後のところで、今成先生が折伏をとる勝劣派が寺院数でいうと三十五番目ぐらいで、撰受の一致派の日蓮宗が第五番目であると。だから一致派の取つて

おる撰受路線の方が教線が拡張しているというご解釈があつたけれども、新興教団をみたらどうか。折伏大行進を行つておる創価学会は、自称八百万世帯を有するような大教団になつた。霊友会、立正佼成会も、初期においては折伏路線を取つていたではないか。だから撰受路線をとつた方が教線が拡張するということは軽々にはいえないのではないか、というご意見が出ました。第一日目の最後には、『観心本尊抄』における愚王と賢王のところ、折伏を行うのは在家で、出家は撰受なんだ、というところがあります。そういうふうにご文章がありますけれども、このことをどう考えるのかということが翌日の課題として引き継がれました。そして二日目でございますけれども、日蓮正宗においては在家の人に折伏をさせて、出家の人は折伏をしていない。もう少し正確に言いますと、出家は身口意三業の口業では行すが、身業実践ではむしろ在家を教化して、具体的には学習会なんかを開いて、折伏をさせている、折伏を在家にさせている、そういう形で折伏路線を取つている。そういう解釈がある。我が教団はそのことをどう考えるのか、今後検討するべきではないかという意見が出ました。龍口法難までに百人いた門弟が九十九人まで退転してしまつたと、このことに対してどう考えるかということでもありますけれども、師匠についていと大聖人はいわれておるので、そのまま教化の場合においても忠実にですね、大聖人のお考えは我々は引き継いで行かねばならない、だから折伏路線を取るべきだという意見も出ました。今成先生は『如説修行鈔』が偽書だといわれているけれども、そうではないという意見が出ました。『如説修行鈔』は日興上人の弟子である日尊上人が写本したものでありますけれども、日尊上人は宗祖が亡くなられて十五年ぐらいの時であつて、大聖人の精神をむしろ伝えておる内容なのだからそれを偽書と扱うことはいかかなものか、という意見も出ました。撰受折伏は、平時においてはどうなのか、戦時においてはどうか、という意見も出ました。戦時と平時というふうにご文章を解釈すること自体、日蓮教学から逸脱するのではないか。二者択一的に論じるのは浄土念仏的思想なのではないか、ということもでております。今成先生が、折伏は暴力だ、というのは問題であると言う意見も出ました。涅槃経は専守防衛論であつて、軽々

に暴力とは言えない。涅槃経は傍依の經典であつて、そこだけを強調して取りあげるべきではないという意見も 들었다。あと、教学の現代的把握というところでご意見を頂こうと、問いかけをいたしましたところ、本化妙宗とか他の日蓮門下の他の教団の本はとても活力が出る、よしわかつた、これでいこう、という勢いが出てくるけども、どうも宗務院から発行するところの教義読本では活力が出てこない。現宗研においては、勇氣活力の出る研究をしてほしいというご意見が出されました。この二日間の討議を踏まえまして、大筋としては撰折がどうもかみ合っていないということが大勢でありました。しかしながら伝統教学を踏まえざるべきであるという意見が圧倒的に多くて、日蓮聖人はやつぱり折伏正意だと、傍意として撰受を考えるべきだ、撰受折伏は表裏で考えるべきだという意見が出ておつたようです。この中で、どうしてもこういう研究をしてほしいということが出ております。撰受折伏を論じる場合、日蓮聖人在世の時代、日蓮聖人滅後の鎌倉期の時代、室町期の時代、そして江戸期。それから明治の問題。大正期の撰受折伏、昭和戦前。それから戦後の五十年を踏まえて、撰受折伏の流れを追いかけながら今後の教団を考えていかなければならないでしょう。あるいは、三派合同以前、例えば明治維新においては五大本山連合体が日蓮宗の伝統であります。身延、池上、中山、妙顕寺、本圀寺の流れが、現在の日蓮宗であるはずであります。機と時代、それから教団論を踏まえた撰受折伏を考えなければならない。自己の撰受折伏と教団がどう繋がるか、そういうことを考慮に入れて研究すべきだと、そういう意見が出ました。どうも失礼いたしました。

全体会議座長 どうもありがとうございます。それでは全体会議ですね、十二時十五分までということ、あと残り時間少ないですけども、三分科会の報告を聞きまして、質問・要望・アピールがございましたら、どなたか挙手で、管区とお名前を言って頂きまして、ご発言をお願いします。

A 北海道東部・内山と申します。第二分科会の中で葬儀の諸問題に関する前説としまして、電話相談の事例が紹介されました。東京のあるお寺で戒名をいただく時に三百万円といわれたという話でありましたが、我々一般教師が

相談内容にアクセスする事は、可能なのでしょうか。もし可能であれば、大変興味あるところでございますので、どういった相談が寄せられているのか私たちに知らせて頂ける何等かの手段があるようでしたらぜひ、お願いしたいという事です。また、この中央教研全体につきまして私共参加させて頂いて、大変価値のあるものであります。とくに遠隔地でございますので、前泊し、交通費自弁できたのですが、第二分科会の方々、大変価値のある運営をいただいたことを御礼申し上げます。ありがとうございました。

全体会議座長 どうもありがとうございます。今のご質問で、テレホン相談の内容に対しまして、一般教師がその内容を知ることができるのかどうかということでしょうか。

A そうです。

全体会議座長 これにつきまして、司会の伊藤立教主任さん。

B どういう相談室なのか教えて下さい。

全体会議座長 ちょっとお話の経緯を。

A 日蓮宗の電話相談室です。

B 日蓮宗の相談室。東京東部さんでやってらっしゃるのはあるけれど、日蓮宗の電話相談室はないですね。

A 東京東部ですか、じゃあ仏教テレホン相談ですね。

B 出所がわかりませんのでお答えできませんが、ご発言なった方が言って頂くとわかるんですが。

A 東京東部の教化センターの担当だそうですね。ありがとうございます。

B 電話相談したら三百万円といわれたと言うことですか。

A そうです。

B 電話相談員がそう答えたということですか。

A そういった相談があつたということです。

B その相談内容をもつと知りたいということ。

A 相談事の事例、いろんな相談がある中で。

B 東部さんの出版物なんかがありますので、ここにお問い合わせは可能と思いますけれども、東京東部電話相談室というのがありますので。

A ありがとうございます。

全体会議座長 他にどなたか、ございますでしょうか。

C 大阪の有本でございます。電話に関してはちよつとアクセスがわかりませんが、大阪ではメール相談をやつていまして、大阪の布教師会でメールの相談についてのアクセスですね、こういうものの答えは出ると思います。以上です。

全体会議座長 ありがとうございます。他にどなたかございますでしょうか。今回の統一テーマが「日蓮宗の布教を考える―通仏教化した現状と摂受折伏問題」だったんですが、各分科会に出られまして何かご感想はございますでしょうか。

D 愛知三河の都築ですけれども、昨日の質疑応答で今成先生と伊藤先生の対談があつたんですけれども、摂受と折伏で伊藤先生は折伏論を、今成先生は摂受論を話したんですけれども、最後に伊藤先生がおっしゃったんですけれども、考え方の違いだなといったことと、その考えは迹門の考えだとそういったんですね。本門の考えでいくと折伏なんだと。事の一念三千から考えた場合は折伏になるのか、そのところをちよつと交通整理して帰りたいなと。その辺のところ、ちらつと伊藤先生がおっしゃったんですから。あの質疑応答の時間の対談は、その疑問点を残しながら終わつとるものですから、そこら辺の結論を出してほしかつたなと、そういうわけです。以上です。

全体会議座長 どうもありがとうございました。これに関しましては、今後の参考にして頂くということで。

D 所長さんに一つ。

全体会議座長 所長、お願いいたします。

現宗研所長 伊藤先生の控え室へご挨拶に行きました。そうしましたら、時間が無い、何としても時間が無い、私の基本はやはり本化別頭の日蓮聖人の教学、本仏、本法、本化という事の一念三千という、この背景のことをもっともお互いにみんな勉強しないといけないな、という印象を持ったというご意見を頂きました。これ、控え室の私的な対談でございますから。でもこれは、正しくこのテーマにもとづく「通仏教化した現状」ということを考えると、そのことを講師先生も痛感しておられたなというふうな。日蓮聖人の命がけでこのことを伝えなければいけないんだという使命感のところをもっと私たちは知らないか、というようなことをつぶやいておられました。これは宿題にさせて頂きたいと思えます。

D ありがとうございます。私も研究します。

全体会議座長 ありがとうございます。あと五分ほどお時間がございますが、どなたか。

E 失礼いたします。本年度より研究員をさせて頂いています八竹と申します。本来であれば研究員はあんまりいっちゃいけないんでしょうけれど、せっかく皆さんいらつしやいますので、摂受折伏についてお聞きします。私は愛媛県でございますので、田舎の方におきまして、まずは教学的な問題よりも、まずは数といましようか、実際に皆様がどのような布教をされたのかということ、今お聞きしてすぐわかるのは実際の数、どのくらい増えたか減ったかというふうなことをお聞きできればと思うんですが、現実的に新興宗教は爆発的な伸びをしております。年間何十人何百人と増えているお寺があれば、そういうふうなお寺さんの実例をお聞きできればと思いますので、どなたか、うちは年間百件三百件増えましたというようなお寺さんがあればお聞きできればと思うんですが、どうでしょう

か。

全体会議座長 はい、有本上人。

C 今おっしゃった、打ち出の小槌のように何十件何百件増えるというような方法は、我々見あたりません。現状は、新興宗教もよくご覧になったら分かると思いますが、この不景気にね、減ってるはずですよ。私、大阪市ですけどもね、バブルの当時に創価学会員が聖教新聞を配ってるんですよ、ずっとね。だいたい軒数はわかります。それらの人がみんな、家閉めて出て行ってしまっただけ、いまおらないんですよ。新聞はこのごろ配ってありませんよ。そうするとね、新興宗教すら減っていくのが見えてるんですね。松下電器の社長が申しましたけどね、宣伝を忘れたら減っていくんだと。だいたい、黙ってたら減っていくんですよ。ということは、テレビが高いというのは宣伝費が入っているから高いんでしょう。宣伝費を抜いたらもつと安くなるのと違いますかとというと、そうですと。だけど我々が宣伝しているのはね、実は購買者に対して宣伝しているのであってね、これを止めたら減ってしまうんだと。だから我々は宣伝費をかけてテレビの広告をし、忘れられないようにしているんですよ。皆さんご存知のようにね、ミスター石けんとかそれから名前出して悪いですけど何々鉛筆とか、クレパスとか、消えていった商品もたくさんあるでしょ。どんどん宣伝している何かレとか、よく買われるというものは、絶えず宣伝している。これが、折伏であり摂受であろうと思います。現状はね、お葬式でも減っているはずですよ。大正年間の方が非常に少ない、昭和の戦争で随分亡くなっておられるんです。だから葬儀社の人も困っているんですよ。この時代に信者を何百軒増やすのは無理ですけども、次のいわゆる子供ですね、子孫達を教化していく、それがやっぱり大事なことで、親とか子供とかをですね、お寺へ連れて行かなければならぬ。今の阪神タイガースの「六甲おろし」、見てご覧なさい、いろんなキャンペーンでものを売っているでしょ。あれ、阪神デパート、いつたらずらつと並んでいるんですよ。それを誰が買うか、大人が子供や孫に買うんですよ。それをもって帰ってね、次の阪神ファンを作ってるんですよ。我々がやらにや

いかんのは、そういうことですよ。だから今すぐにとはいかないけど、時間のかかることですが、長く続けていく、これが我々の仕事ではないかと。文章であり、言葉であり、あるいは映像であり、そういうことが実は大事なことになるんじゃないかと、このように思います。以上でございます。

全体会議座長 どうもありがとうございます。じゃあ、石川上人。

F 補足の意見を言いたいと思いますけども、今成先生が「如説修行鈔」を否定されましたけれども、先程報告にありましたとおり、富士門流の日尊上人が書写したのは宗祖滅後十五年です。その十五年という意味をもう少し皆さんにわかって頂きたいんですが、「如説修行鈔」を書写した宗祖滅後十五年というのは、六老僧がみんな生きていた時代なんです。日尊上人は、日興上人が講義をしている時に、外の葉が落ちるのを見たために怒られて破門、それ以後三十六ヶ寺を全国に建てて破門を許されたわけです。そのお上人が如説修行鈔を偽作して、それで布教したということは、日興上人が許されるはずがないです。今成先生が如説修行という言葉がないから否定されましたけれども、その点を昨日質問しようと思いましたが、残念ながら質問の時間がありませんでした。ですから、「如説修行鈔」は真作だと私は理解しています。なぜならば、宗祖滅後十五年、その十五年という時代は六老僧が全て健在な時代であります。という時代背景を考えて頂きたいと思えます。以上です。

全体会議座長 ありがとうございます。

G 失礼いたします。広島県の松本恵行と申します。お時間のないところ、大変恐縮なんです但有本先生が、「聖教新聞」の話をされておりましたので、これは要望なんですから、創価学会の池田大作氏が亡くなった後に必ず創価学会の混乱、信者の混乱といえますか、そういうことが必ず起きると思います。今から対策を立てて頂いて、そういった創価学会の信者信徒をどうやって本宗に導き入れるかという対策をぜひ取って頂きたいと思えます。よろしくお願いたします。

C 現代と教化プロジェクト部会の討議の中で、その件はすでにでております。池田大作氏が亡くなった後、副会長二百名くらいおりますですかね、亡きあと、政権争いも出てまいります。つまり学会漂流民をどうするか。純粋に教学を研究するようになりまして、だんだん一致派教学に近づいてくる意見を持つ創価学会員もおるようですから、そういうことを踏まえて研究していこうという考えはありますので。するかしないかは現宗研の判断ですけれども、意見は出ておりますので、任せて頂きたいと思えます。失礼しました。

全体会議座長 どうもありがとうございます。それではお時間となっておりますので、これで全体会議を閉じさせていただきます。よろしくお願ひします。

司会 ありがとうございます。ごくろうさまでした。このまま閉会式を行います。よろしくお願ひします。